

# 日本歴史言語学会 2017 年大会研究発表要旨

## ポスター発表

### 1. 西田 文信 (東北大学)

#### ブータン王国の East Bodish 諸語の系統分類について

Linguistic Survey of Bhutan (van Driem 1991) の出版以前はブータン王国の諸言語についてはまとまった記述が皆無であった。現在ブータン王国では確認できる限り 19 言語が分布している。

これらの言語の系統関係については言語学的根拠に基づく定説は未だ存在しない。本発表の目的はブータン王国で話されている East Bodish 諸語の系統分類を提示することであり、発表者自ら収集した語彙データに依拠 2 つの方法論を用いて得られた言語間の親疎関係を報告する。第一に、音韻変化のデータを証拠として再構築することを目的とし、複数の合流変化を証拠として最節約原理に基づき系統を分析した結果を提示する。この方法論では系統を論じるために分析の対象をすべて同じレベルで取り扱った。第二に、言語間の語彙比較を行い語彙の一致率を算出した結果を報告する。一致率の算出は音韻対応に合致した類似であるかどうかという基準で行った。

### 2. 服部 義弘 (大阪学院大学)

#### 歴史的音変化と言語のリズム特性との相関について

言語がそのリズムの観点から、韻脚拍 (いわゆる「強勢拍」) 言語、音節拍言語、モーラ拍言語に分類されることはよく知られているが、各言語は通時的にも、また同一言語の方言間でもつねに同じリズム類型を保つとは限らない。さらに、上記 3 類型は画然と区別されるわけでもなく、同じリズム特性をもつ言語でも、その特性を強くもつものから、その度合いが低いものまで、連続変異(cline)を成していると考えられる。ところで、分節音の歴史的变化の研究は従来、リズムなどのプロソディーの変化の研究とは独立に行われることが多かったが、両変化は密接に連動しながら進行してゆくと考えられる。近年、韻脚拍リズムをもつとされる言語と、音節拍もしくはモーラ拍リズムを有する言語とでは、分節音の史的变化の様相が異なっていることが明らかになってきている。

本発表では、英語音韻史上の代表的な音変化のうち、一連の連鎖的推移および二重母音化、長母音化、短母音化、母音弱化、音削除などの各変化が、英語の韻脚拍リズムというプロソディー特性に添うような形で生じることを明らかにしたい。とりわけ、連鎖的推移に関しては、いわゆる大母音推移を始めとする上昇過程だけでなく、短母音推移に代表される下降化・中舌化の推移現象についても、リズム特性との連関という視点から検討を加えることにより、変化の様相をよりの確に捉えることができるものと思われる。

## 口頭発表

### 1. 末森 明夫 (特定国立研究開発法人産業技術総合研究所)

拡張記号図式による借用口型および空書の合成構造の記号論的分析  
：手話歴史言語学への援用に関する予備的考察

日本手話は近代初期に聾啞教育の飛躍的拡充に伴う形で、著しい語彙体系および構文体系の変容を遂げたものと見られている。しかし、日本手話は手指動作の他に文法化非手指動作、借用口型や空書など多様な構成素を包摂しているにも関わらず、これらの記号構造を体系的・統一的に記述する術が限られており、これが手話歴史言語学の拡充に対する阻害要因の一つになっていることは否めない。

本発表では、日本手話の記号構造を体系的・統一的に記述し分析するために拡張記号図式 (黒田 2013) を採用し、音韻極 (*i.e.* 音声言語音韻極)、書記極、手話極、意味極 (*i.e.* 概念極) により構成される記号空間における借用口型と空書の定置をはかると共に (黒田 2015、原 2015)、概念融合論を援用し借用口型が共起する間投詞群の共時的・通時的分析をおこなった (黒田 2016)。

一例として、借用口型「いみ」が共起する日本手話間投詞 [意味] は、手話極 [意味/理由] と音韻極「いみ」が概念極に投影され融合した概念構造が、音韻極「いみ」や手話極 [意味/理由] と記号関係を持つそれぞれの概念構造とは異なる単位として意味極に保存されることにより、日本手話間投詞 [意味] の意味・機能の拡張における **prototype** になったものと考えられる。

黒田一平 (2013). 「認知言語学に基づく拡張記号モデルの提唱 —ネットワーク・モデルを用いた文字論へのアプローチ—」『言語科学論集』19 : 1-25.

黒田栄光・原千夏・末森明夫 (2015). 「日本手話の応答詞・文末詞に呼応する借用口型/いみ/」『日本手話学会第 41 回大会予稿集』東京.

黒田栄光・原千夏・高嶋由布子 (2016). 「文末詞「いみ」の作る日本手話の複文構造」『日本手話学会第 42 回大会予稿集』東京.

原千夏・黒田栄光・末森明夫 (2015). 「日本手話における空書 —「～代」の語彙化に関する予備的考察」『日本手話学会第 41 回大会予稿集』東京.

## 2. 相良 啓子（国立民族学博物館）

### 日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現の構成とその変化 — 「10」「100」「1000」に着目して—

本発表では、歴史的に関係がある日本手話、台湾手話、および韓国手話の二桁から四桁の数の表現の構成の変化を、歴史資料と現地調査によるデータに基づき、明らかにする。これらの言語には、二系統の「10」「100」「1000」の表現があり、この二系統の分布と数の表現の構成の分布を合わせて分析すると、以下のことがわかる。まず、「10」「100」「1000」の桁数をゼロの数の違いで表現する A 体系があり、ここから、数を表す手型と桁を表す動きの組み合わせという数詞抱合を用いる B 体系へと変化した。これに伴い数の構成が、各位を数と桁数を順に並べる表現から、各桁を 2 つの形態素を同時に表す表現に変化した。並べる表現は、現在では台南のみで使用されており、それ以外の地域では数詞抱合を用いるようになった。一方、韓国手話では、二桁から四桁の数は日本や台湾同様 B 体系が使われるが、「10 時」、「テストの 100 点」など特定の意味を表す場合には A 体系が用いられ、特定の表現に古い形が残されていることがわかった。

## 3. 島 映子

### 『竹取物語』における「無助詞/ハ」の対立—現代語の「ガ/ハ」との比較—

本研究は、最も古い物語作品とされる平安初期の『竹取物語』を取り上げ、原文の「無助詞 Φ/は」の用法と現代語訳の「ガ/ハ」の用法を比較検討し、その差異を明らかにした。それにより、その後どのように「Φ」に「が」が入り込んだのかを探る足がかりが得られると考えた。

原文の「Φ」は、現代語訳で 3/5 が「ガ」、2/5 が「ハ」になっている。この「Φ→ガ」と「Φ→ハ」の共通点を明らかにすることで、平安初期の「Φ」の働きが見えてくるはずである。また、「Φ→ハ」と「は→ハ」の相違点を明らかにすることで、平安初期の「は」と現代の「ハ」の差異も明らかになるはずである。こうした検討の結果、以下の結論を得た。

- ① 『竹取物語』の「NΦ」には、いわゆる「語りのハ」と言われる「既出名詞提示」が含まれ、平安初期にはこうした用法が「は」になかったことが示された。
- ② 平安初期の「NΦ」と「Nは」は、「Nに最も近い述語に対して働くか、文末述語と結ぶか」という機軸で使い分けられている。
- ③ 現代においては、②の機軸以上に、「トピック・コメント構造で述べるか、事態描写として述べるか」ということが重要な基軸として意識されている。

#### 4. 藤原 敬介 (京都大学)

##### ルイ諸語とボロ・ガロ諸語との声調対応

本発表ではチベット・ビルマ語派サル語群に属するルイ諸語（チャック語、カドゥー語、ガナン語など:筆者の一次資料）とボロ・ガロ諸語（ボロ語、ガロ語、ティワ語、ラバ語、トリブラ語など:Joseph & Burling 2006 などの二次資料）について、声調の対応関係を考察する。ルイ諸語もボロ・ガロ諸語も音節声調言語であり、低声調と高声調が基本的には弁別的である。調査の結果、開音節については、ルイ祖語の低声調はボロ・ガロ祖語の高声調で、ルイ祖語の高声調はボロ・ガロ祖語の低声調で対応することがわかった。閉音節では声調の弁別性がひくくなるためにボロ・ガロ祖語では声調が再構されてこなかった。しかし、ルイ諸語と比較することにより、閉音節についても、開音節と同様の対応を再構しうることがわかった。

##### 参考文献

Joseph, U. V. and Robbins Burling 2006. *The comparative phonology of the Boro-Garo languages*.  
Mysore: Central Institute of Indian Languages.

#### 5. 土肥 篤 (東京外国語大学・院)

##### 19世紀ドロミテ・ラディン語の疑問文における心態詞

北イタリアで話される少数言語ドロミテ・ラディン語は、ロマンス語でありながら豊富な心態詞を持つことが特徴の一つである。中でも *pa* は現代ドロミテ・ラディン語において疑問文に現れ、方言によってはそのマーカーとして機能する点から特異な位置を占めている語であると言える。

この語は他の心態詞と同様に文法化によって成立したと考えられ、疑問文のマーカーとしての用法はそこからさらに発達したものであると言える。実際、19世紀の文献をみると、現代においてマーカーとして使われる方言でもモーダルな用法をまだ持っていると思われる例が見られる。

本発表では近年になって作成されたオンラインコーパスを用いる。19世紀のドロミテ・ラディン語を対象に、特に *pa* が用いられる疑問文についてその心態詞としての使われ方を検討してみたい。また検討の際には、現代語との比較および少なくとも五つある方言間の差異を考慮に入れる。

## 6. 海田 皓介 (千葉大学)

### 古英語 *behātan* の消失

英語の歴史上、類義語の交代は語彙研究の中で大きな位置を占めている。一例として、‘to promise’を意味する動詞の交代を考えると、現代英語の *promise* は *The Oxford English Dictionary* (2nd ed., 1989)によれば 15 世紀より用いられている。古英語から近代英語まではこれとは別に *behātan* (語形は古英語のもの) という動詞が‘to promise’の意味で用いられていた。この動詞は古英語の強変化動詞 *hātan* ‘to name, command’に接頭辞 *be-*が付加されたもので、他にも接頭辞 *ge-*の付加された *gehātan* (意味は *hātan* に類似) も存在し、三者のいずれも現代英語では廃用となっている。 *The Dictionary of Old English: A to H Online* (2016)による各語の定義から、*hātan* と *gehātan* は語義、語形とも互いに類似していることがわかる。一方両者は *behātan* のように‘to promise’の意味で用いられることもあり、ここから *hātan*, *gehātan*, *behātan* 三者が消失に向かう過程においてどのような傾向が見られるかが問題となる。本発表は *behātan* と *hātan*, *gehātan* との比較から、*behātan* 消失の要因を探る。この発表を通して語彙研究において意味的側面だけでなく、形態的側面も一定の役割を果たしうることを示したい。

## 7. 西出 佳代 (神戸大学)

### ルクセンブルク語における推量の助動詞 *lux. wäerden*

中部フランケン方言に属すルクセンブルク語では、過去現在動詞に由来する *lux. kënnen* (nhg. *können*) と *lux. müssen* (nhg. *müssen*) の他に、ドイツ語 nhg. *werden* に当たるとされる *lux. wäerden* が推量の助動詞として挙げられる (Dammel 2006: 159-161; Schanen/Zimmer 2012: 22)。nhg. *werden* が、他に始動相のコピュラ、受動の助動詞などの用法を有する多機能の動詞であるのに対し、*lux. wäerden* は推量の助動詞としてしか用いられない。

本発表では、*lux. wäerden* の機能について 13 世紀末の資料と現在のルクセンブルク大公国国会における討論の資料を比較する。また、nhg. *werden* が強変化の屈折を示すのに対し、*lux. wäerden* は弱変化の屈折を示す、変種 *lux. wäerten* を有するなどの特徴から、同動詞の語源が nhg. *werden* とは異なる可能性を指摘する。

### 参考文献

- Dammel, Antje 2006 Präteritopräsentia im Luxemburgischen – Eigenwege einer verbalflexivischen Sonderklasse. In Moulin, Claudine/Damaris Nübling (Hrsg.) *Perspektiven einer linguistischen Luxemburgistik*. 139-169. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Schanen, François/Jacqui Zimmer 2012 *Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.